作品名	北野における 元禄15年勧進能場の復元設計	作品番号	1/5
校名	京都美術工芸大学		
氏名	西元　愛理		

北野における元禄15年勧進能場の復元設計

勧進能について

勧進能とは近世以前は寺社の神楽などの芸能を奉納する事から始まった文化であり、多くは貴族に対して披露されていた芸能である。
中世以後は、寺社の堂塔建立の為の資金を集めることが目的として行われた。近世以降、芸能は職能化され役者（太夫）による興行が行われるようになり、庶民にも披露されるようになった。
江戸時代には、京都の【北野】・【四条河原】などで大規模な勧進能興行が屋外で行われ、興行では歌舞伎や能が公演された。

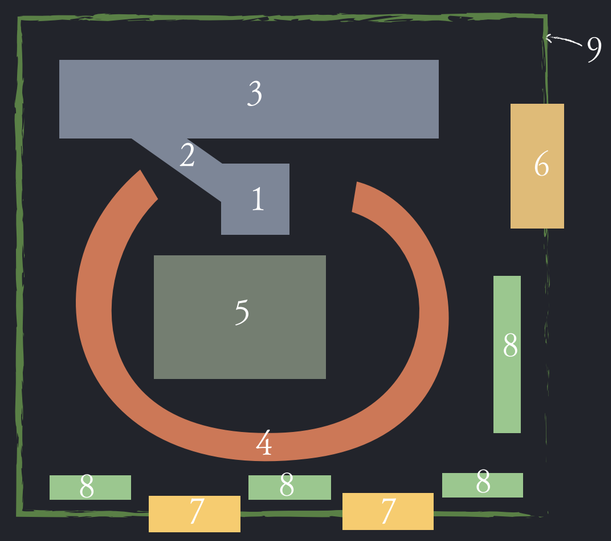
勧進能場とは

勧進能場とは勧進能が行われる舞台と客席、出店である茶屋の建築群。
⇒臨時の屋外建築群である。
勧進能は短期間の興行であり、勧進能場は、１ヶ月ほどで建てられ、興行の期間が終わると解体された。

１. はじめに

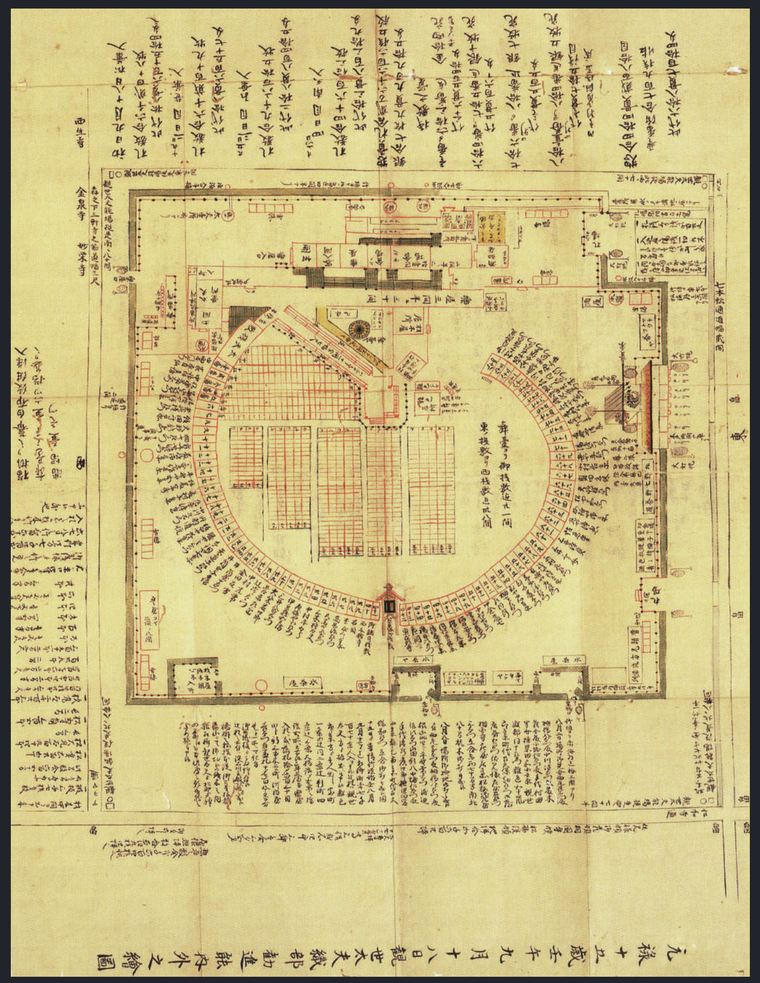
京都は、古来より芸能文化が盛んであり、歌舞練場や南座など歌舞伎や能が披露されている屋内型舞台建築物が多く残っている土地である。特に北野社周辺は芸能文化が発展した土地であり、多くの記録が残っている。本研究は芸能文化が色濃く残る北野の地域で江戸時代に行われた勧進能興行を対象とする。京都での能場建築に対する復元例がなく、また史料として平面的な絵図のみの場合が多い。そこで規模や舞台構造を立体的に明確にし、芸能文化が当時の生活の中で重要視されていたか、興行の歴史的背景と舞台建築の特質との関わりを明らかにすることは意義があると考える。

元禄 15 年勧進能場内　主な建築物



1　舞台
2　橋掛り
3　舞台裏
4　桟敷（客席）
5　畳座席（客席）
6　太鼓櫓・鼠木口（入口）
7　乗物口（入口）
8　茶屋
9　柵（竹柵・筵囲）

作品名	北野における 元禄15年勧進能場の復元設計	作品番号	2/5
校名	京都美術工芸大学		
氏名	西元　愛理		



復元内容

京都北野社領隣接の土地（現：京都府京都市上京区）で元禄 15 年（１７０２）
９月１８日から２１日に行われた勧進能興行の為に造られた屋外型能演場の復元を行う。
史料として檜書店蔵「元禄 15 年壬午九月十八日観世太夫織部勧進能内外絵図」『観世太夫重記』（左図）、
及び歴彩館所蔵「聚楽内野ニ而観世織部勧進能場絵図」『富田屋文書』を平面の配置図の参考とする。

復元方法

① 北野での勧進能の記録絵図や覚書の収集
② 洛中洛外図などの絵図や屏風より能舞台が描かれている部分の絵図の収集
③②で収集した絵図に描かれている能場の形状のリスト化（舞台構造、客席の構造など）
④絵図や覚書、現存している能舞台を参考とし、３Ｄ図面の作成、模型の制作を行い、勧進能場の復元を行う。

史料1：元禄 15 年壬午九月十八日観世太夫織部勧進能内外絵図（檜書店蔵）
出典：独立行政法人日本芸術文化振興会発行，国立能楽堂事業推進課調査資料係編『令和2年度国立能楽堂特別展　勧進能』

2．北野社周辺における芸能文化について

興行が行われた北野の地域は、菅原道真を祀る北野天満宮を中心に芸能文化が栄えた土地である。平安京建設当時、平安京の北西に位置し内裏と近い距離にあり宮廷との関わりが多くあった。また、北野天満宮は中世に入っても足利将軍家や豊臣秀吉、江戸幕府からの崇敬を受けた。神事であった「神楽」などの芸能は、朝廷の保護が外れ庶民へ披露され、時代が流れるにつれて芸能は職業となり、神事から娯楽に変化した。

近世にはこの芸能の広がりにより観客の増加や勧進能主催者によって規模が広がり、北野の地域ではこの変化に合わせて興行が披露される場所が北野社境内から北野社周辺の森や畑を切り開き、史料２のように使用される土地が拡大化された。

芸能文化の歴史
平安時代～鎌倉時代
貴族　　庶民
「神楽」　「田楽」
「舞楽」
「猿楽」
「白拍子」

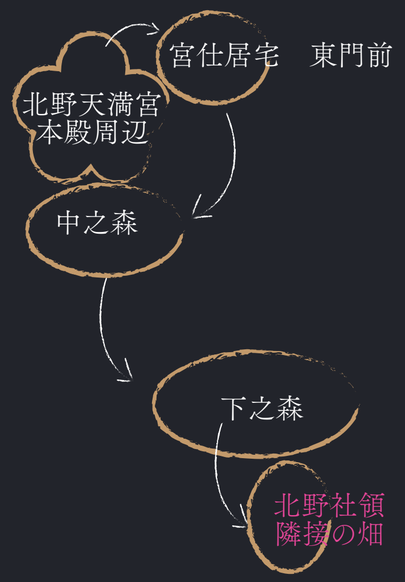
平安時代の芸能は朝廷・貴族の為の文化であり、神事として披露されていた。庶民は見ることが困難。

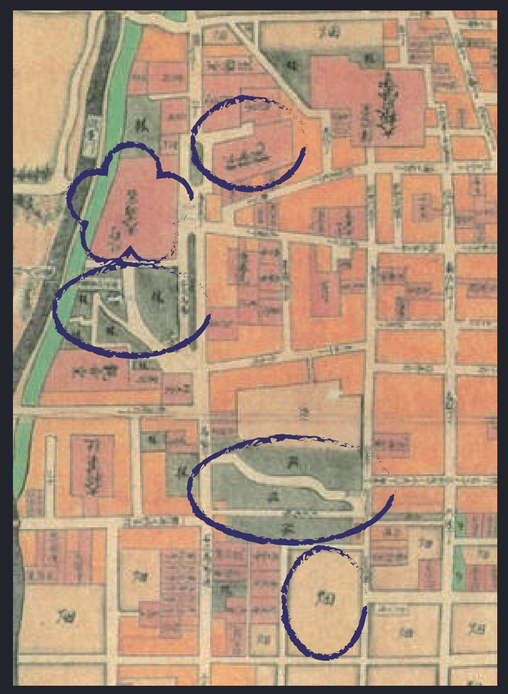
鎌倉時代～
鎌倉時代
「猿楽」→観阿弥、世阿弥
桃山～江戸時代初期
「猿楽」から発展
「能」、「歌舞伎」
→出雲阿国

江戸時代～
「女歌舞伎」
→寛永６年（1629）禁止
「若衆歌舞伎」
→承応元年（1652）禁止
以降、「野郎歌舞伎」から
「能」「狂言」「歌舞伎」へ

芸能は神事から娯楽へ職とする者の登場

北野社周辺　芸能空間の変遷





史料2：元禄 14年實測大絵図　北野部分拡大図
大塚 隆編　『慶長昭和京都地図集成』柏書房

作品名	北野における 元禄15年勧進能場の復元設計	作品番号	3/5
校名	京都美術工芸大学		
氏名	西元　愛理		

3 -1. 史料からの分析　絵図より

史料１の書き込みより勧進能場内の様子を詳しく読み取ることができた。内容は主に使用材木、桟敷値段、橋掛り装飾、敷地区分、能場建設状況などが書かれていた。中心となる舞台の規模は３間四方（約６m× 約６m）。桟敷席は 84 席あることがわかり、また、御桟敷は蟇股や箱棟が描かれ立派なものであったと推測でき、茶屋など能場内に多くの人が入る事を予想された設計となっていた。

太鼓櫓に描かれた紋

史料3：史料1の太鼓櫓拡大図

太鼓櫓は約6m ほどの高さがあったとされる建築物

史料4：軸付き藤巴
家紋のいろは hp より作成

演目の紋と推測

史料5：八本矢車
宝生流家紋を参考に作成

演劇家の紋と推測

太鼓櫓の紋について

「白布紺染入表藤巴　内ノ方矢車」

まず、太鼓櫓とは周辺に舞台の公演を知らせるための太鼓を鳴らす場所であり、遠くから一目見ることができる高さの櫓である。史料1の絵図には立定的に太鼓櫓が描かれている。（史料3）幕は白幕であり、正面は紺の藤巴（史料4）が描かれ、両側面には矢筈が描かれていたことがわかった。演目についての紋もあることから、演目を表す紋ではないかと推測する。矢筈については、演者の家紋であると推測する。『平安紋鑑』より演劇家の家紋の一覧から矢筈を使用していた演劇家は宝生家ということがわかった。宝生家とは現在で活動している演劇家であり、宝生座は観世太夫が所属する、観世座と室町時代から競演も多く行なっていた記録も残っている。宝生流の家紋は室町時代より八本矢車（史料5）であるが、11 代当主（1772 年没）によって九本矢車へと改められている。絵図の太鼓櫓に描かれた紋の拡大図より元禄の勧進能では八本矢車が描かれていることが確認できた。

3-2. 史料からの分析　洛中洛外図・歌舞伎図屏風より

参考史料として洛中洛外図、歌舞伎図屏風より屋外能場が描かれた２２種類の絵図を用いる。史料からは建物群ごとに考察を行った。史料は建物ごとに詳細を分類し、リストを作成した。

史料6：女歌舞伎図屏風　早稲田大学演劇博物館蔵
出典：enpaku 早稲田大学演劇博物館 HP〔https://www.waseda.jp/enpaku/ex/5853/〕

舞台部分拡大図

舞台構造

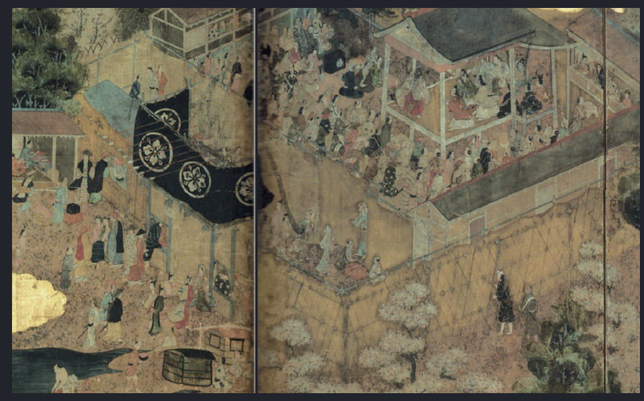
舞台の屋根は、切妻屋根で取り葺屋根と言われる縦板張りの横桟押さえの形式が用いられ、簡易的に造られている。破風も薄く､懸魚（げぎょ）や棟の飾りも木で造られている。橋掛りには幕がかかり、対象の推測と近いと言える。

史料7：東山・北野遊楽図屏風　サントリー美術館蔵
出典：納屋嘉治　京都国立博物館編　『洛中洛外図　都の形象－洛中洛外の世界』淡交社（1997 年 9 月）

桟敷部分拡大図

桟敷構造

構造は貫が入り、切妻屋根で弧を描くように建てられ、高さがある桟敷となっている。高さは人物の背の高さより少し低めであることがわかる。
緑の御簾のようなものがかけられている桟敷と白の垂れ幕がかかっている桟敷があり、位が高い人物の席と推測できる。



史料8：洛中洛外図
出典：納屋嘉治　京都国立博物館編　『洛中洛外図　都の形象－洛中洛外の世界』淡交社（1997 年 9 月）

入口部分拡大図

入口構造

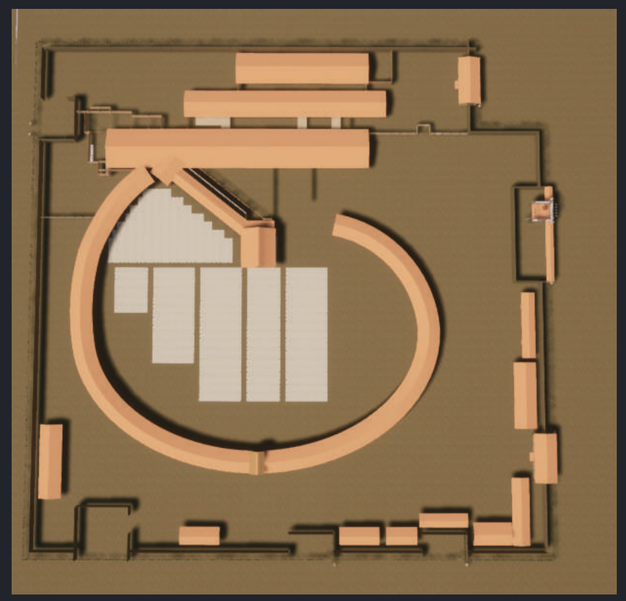
太鼓櫓を中心に描き、人物が鼠木口を潜りながら場内へと入る様子が描かれている。入口を入った先に筵囲があり筵と筵の間を通り抜ける姿も描かれている。場内の外側には中を覗くように人物が描かれているが、竹柵や筵囲の高さは人物の倍ほどの高さがあり、簡単に覗くことができないようになっていると推測できる。

作品名	北野における 元禄15年勧進能場の復元設計	作品番号	4/5
校名	京都美術工芸大学		
氏名	西元　愛理		

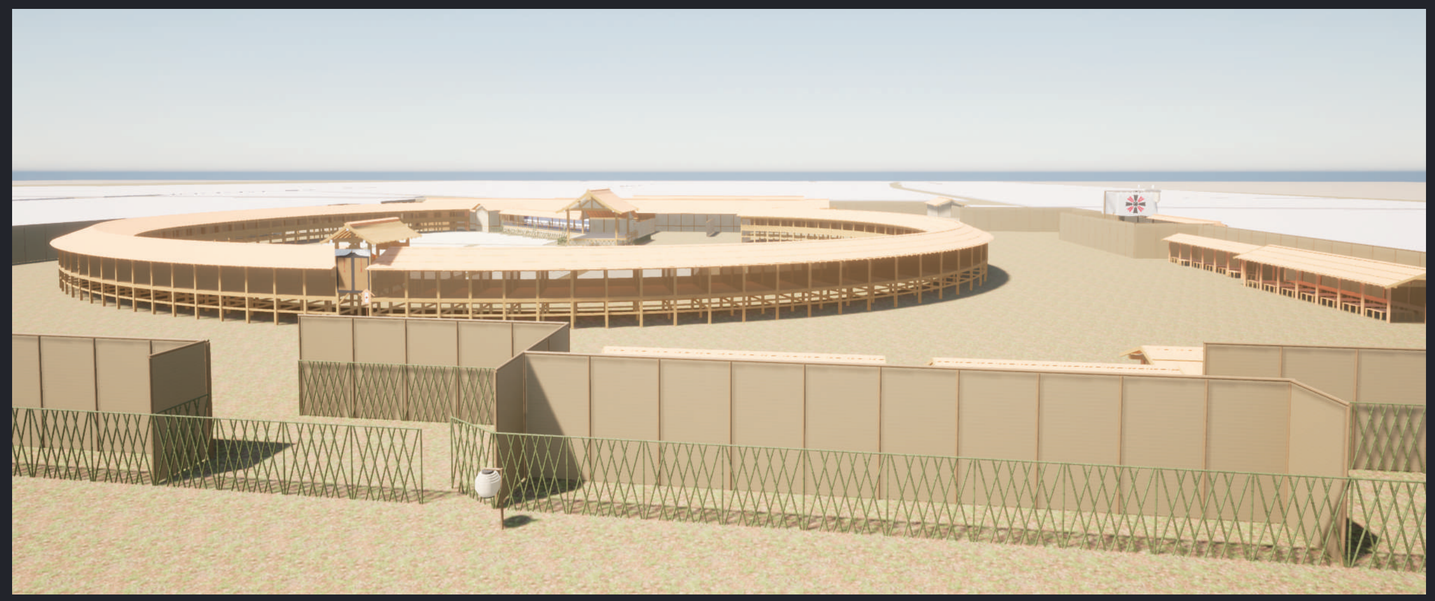
4.３Ｄモデルの作成

絵図の使用材木の長さや豊富な史料からの考察に基づき、３Ｄモデルでの立体的復元を行い、規模の確定を行った。

３Ｄモデル　動画



３Ｄ　俯瞰パース



３Ｄ　全体パース　南東から見る

３Ｄ太鼓櫓・鼠木口　東側

鼠木口は跨ぎ潜りながら入ることができる設計とし、
簡易的な屋根を用いた設計とした。
太鼓櫓の幕の他に、鳥毛の長柄や提灯の復元も行い、当時の様子を表した。

3D 御桟敷

御桟敷は、史料より破風と蟇股を設けられていたことがわかった。また、桟敷席とは違い御簾がかけられ、高さがある建物ということも明らかになった。

３Ｄ　舞台

舞台は、３間四方の大きさと確定し洛中洛外図の傾向より入母屋で取り葺屋根の形式とした。
取り葺屋根は江戸時代に多く用いられた方法である。

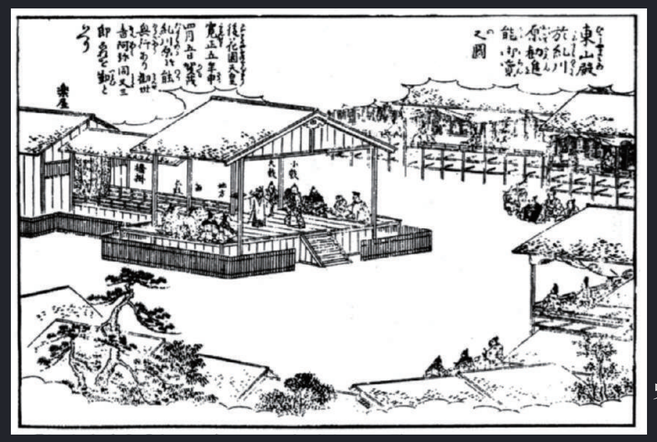
作品名	北野における 元禄15年勧進能場の復元設計	作品番号	5/5
校名	京都美術工芸大学		
氏名	西元　愛理		

5. 模型イメージの作成

模型イメージの作成において、以下の史料を参考とした。江戸時代に予想図として立体的に描かれた絵図は、元禄時代の工法に近いと考え採用した。

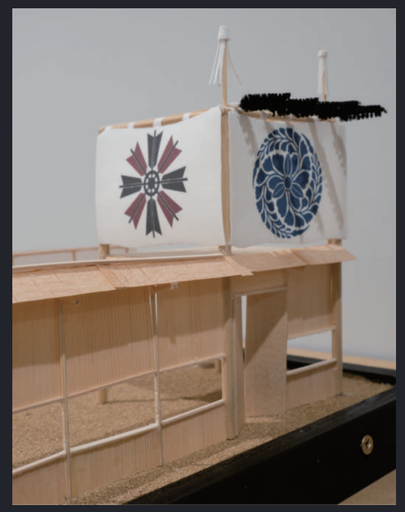
桟敷席は５間ほどがまとめて建てられ、間に１間の桟敷を挟むことによって円形の桟敷席を造り出していると推測できる。

模型イメージはスケール 1/50 で作成した。規模は、勧進能場全体より主要建築物がある部分とする。



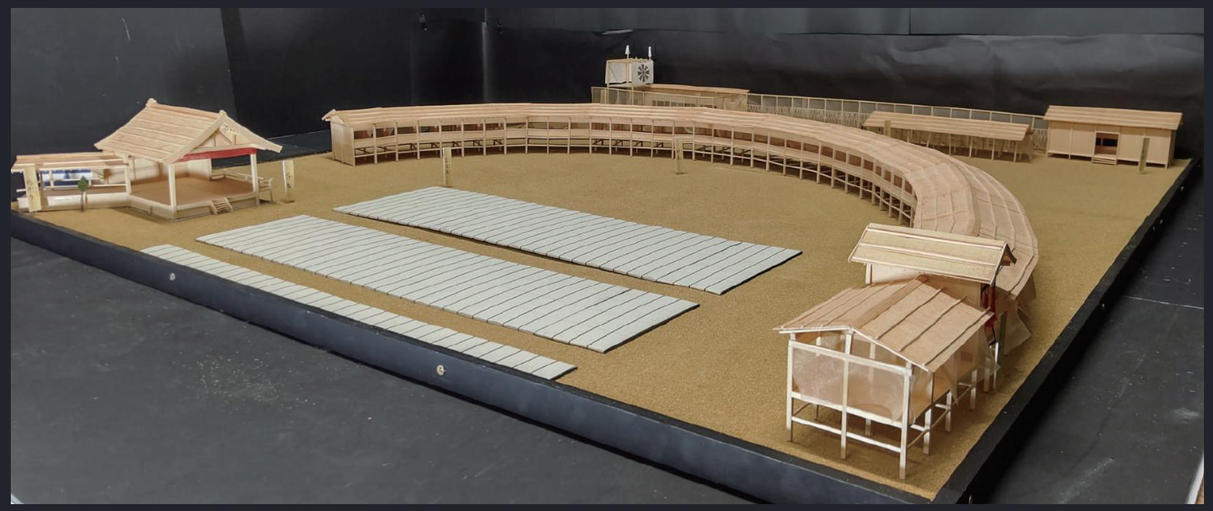
桟敷が円形に近い形で描かれた
立体的な絵図の記録
寛正時代の勧進能の様子を
江戸時代に作成した絵図

史料9：寛正５年糺河原能場絵図『能楽全書』
出典：（株）至文堂編『日本の美術 第529号 近世の芸能施設とその空間』
（株）ぎょうせい出版，（2010年６月10日発行，p.29）



模型イメージ　太鼓櫓

模型イメージ　茶屋



部分模型イメージ　全体

模型イメージ　御桟敷・桟敷

模型イメージ　舞台・橋掛り

6. まとめ

元禄 15 年の勧進能場は大規模であり、多くの人が訪れるため
強度をもつ桟敷や、短期間での建築が可能な構造となっていると
推測できた。
歴史的には、幕府などの権力を表す建築物でもあり、
当時の芸能についての人々の関心が高く、能場建築は
重要なものであったと言えるだろう。

部分模型イメージ　札場・竹柵・筵囲・太鼓櫓・鼠木口